

平成30年度 第1回教育委員会協議会 次第

1 開催日時 平成30年4月23日(月) 18:00~20:00

2 場 所 高知共済会館 3階「桜」

3 内 容
17:30~ 受 付

18:00~ 開 会

議 題

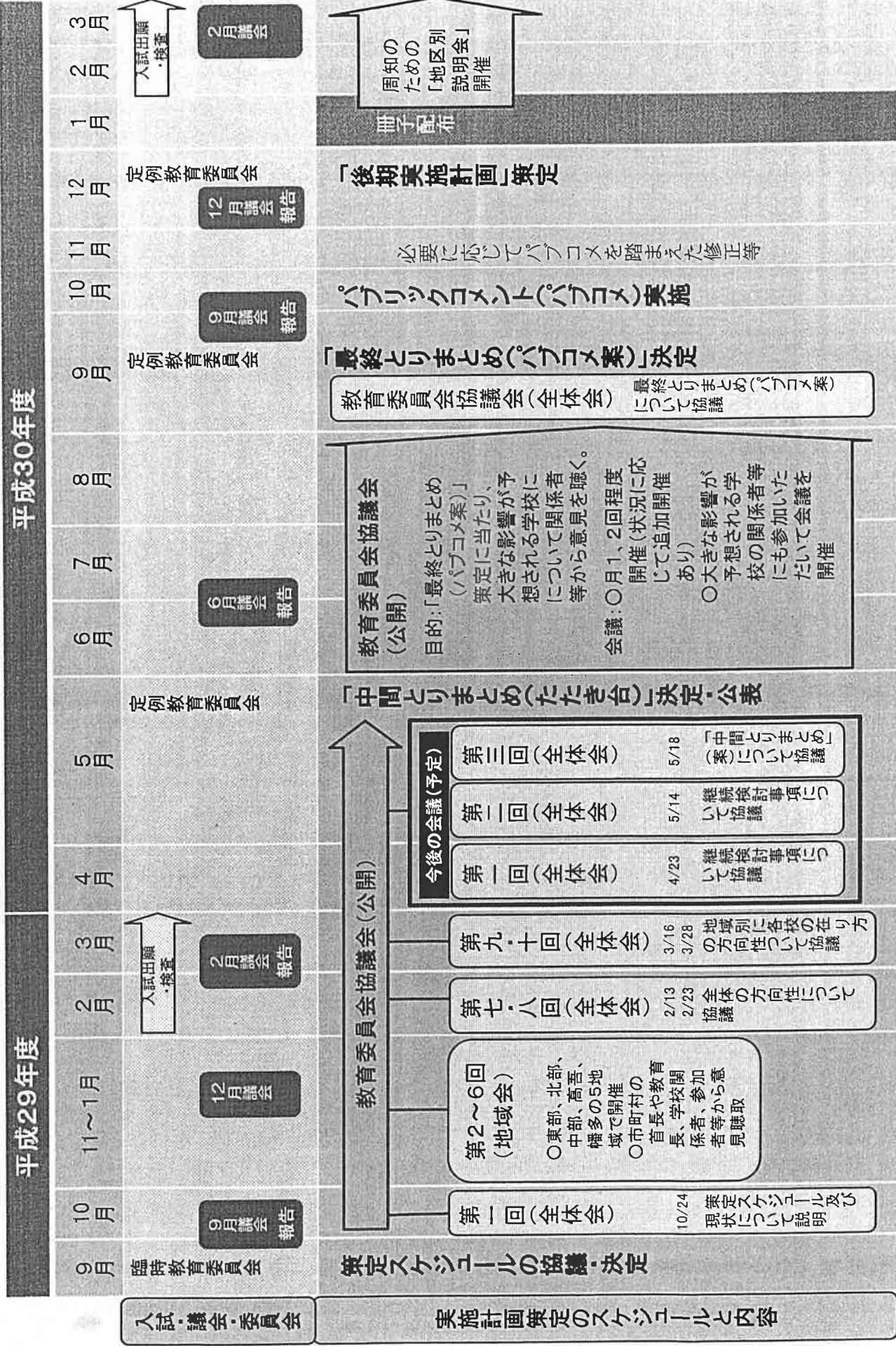
(1) 「後期実施計画」策定スケジュールについて

(2) 高吾地域の継続検討事項について

(3) 幡多地域の継続検討事項について

閉 会

県立高等学校再編振興計画 後期実施計画(H31～H35年度)策定スケジュール



地域別の県立中学校・高等学校の在り方の方向性について

| 学校名 | 「前期実施計画」で明記した学校の在り方 | 平成 29 年 10 月末現在の状況 | 地域会でのご意見 | 「後期実施計画」における学校の在り方の方向性 |
|-------|---|---|--|---|
| 窪川高校 | <ul style="list-style-type: none"> 地域や中学校との連携を強化するとともに、コース制によるきめ細かい指導など、多様なニーズをもつ生徒への支援体制を強化する取組等を通じて教育活動の充実を図り、生徒数の確保に努める。 過疎化が著しく、近隣に他の高等学校がない学校であり、特例として1学年1学級(20人以上)を最低規模として維持する。 | <ul style="list-style-type: none"> 高校生が地域のイベント等に参画する場づくりや中学校との部活動交流を積極的に取り組んでいる。 毎年、四万十町長・教育長・行政関係者との意見交換会を高校2年生が実施している。 地域行政と連携して地域の教育文化水準を高めるように努めている。 平成28年度から四万十町が公設町営塾を開設し、学校内でのインターネット学習教材を活用した取組と併せて、基礎学力の定着と学力向上の取組を推進している。 2年次から2つのコースを設け、大学進学コースでは、年間を通じた進学補習や個別指導等の実施や関西研修(大学訪問)等を通して、進学する意識と学力の向上に努めている。地域リーダー養成コースは希望者も多く、産業に関する科目(農業・商業・家庭)を関連付けながら学び、それぞれの特性を生かした実習や地域課題研究等を通じて、将来地域社会で活躍できる人材育成のためのプログラム開発と、資質・能力の育成に努めている。 文部科学省の「遠隔教育」の指定を受け、同一町内の四万十高等学校と遠隔教育を実践し、専門科目の講座開講を推進している。 進路については、過去3年間の平均は、進学が7割(内半数が4年制大学)、就職が3割(内7割が県内、3割が県外)であり、なお、年々、進学の割合が高くなっている。また、国公立大学への進学者は、H26年度3人、H27年度3人、H28年度1人である。 入学者数(定員80人)は、平成27年度34人、平成28年度41人、平成29年度26人である。 | <p>(学校の存続)</p> <ul style="list-style-type: none"> 今後の地域を支え、発展させていく魅力ある人材の確保と育成を最重要課題として移住定住政策とも連動した取組を進めている。 地域の教育力は移住定住にも大きな影響力をもち、幼保小中高が連携して、誰もが学べる魅力ある教育環境づくりを進めることで、優しい教育の町としてのブランド化を目指している。このためにも県立高校の存在は大きな影響力があり、将来の進路や生き方に影響を与える。 入学者の減少が続いているが、高校の教育活動は地域の活力そのものであり、存続は四万十町の課題である。 四万十高校、窪川高校には特色ある少人数教育の活動を通して、地域の活性化にも寄与でき、地域に愛される、また、期待される学校づくりを進めてもらいたい。 中山間地域の公立高校では、少子化の進展により、大きな定員割れが続いているが、公共交通インフラが進んでいない過疎地域では、保護者負担が年々増加傾向にある。本町でも地元高校に通う生徒の時間的、経済的な負担軽減を初め、高校と地域とのさらなる連携を深め、持続可能な町づくりと魅力ある高校づくりを具体的に進めている。育つ環境で教育格差が生じないよう、また、知識を問う学力ではなく個々の能力が伸ばせ、将来社会で活躍するために必要な力を育むことができる中山間地域の学びの場の確保をお願いしつつ、県全体のより良い再編振興計画後期実施計画になることを望む。 地元からの進学者を50%以上確保していきたい。 <p>(支援策)</p> <ul style="list-style-type: none"> 通学支援、部活動・校外研修の移動経費の負担軽減として支援を行っている。また、放課後の学びの場として、町営塾(窪川・大正の2会場でそれぞれ週5日)を開塾した。補習や総合的な学習の時間への支援、大学へのキャンパスツアーも実施している。「高校魅力化コーディネーター」という位置付けで、窪川高校に職員を2名、嘱託職員という形になるか調整中だが考えている。現在、通学助成を町内の保護者には上限3,000円の交通費の助成を行っているが、来年度は町外の生徒にも拡充しようと考えている。 小中高の連携として、窪川高校では、お茶つみや科学実験を行っている。 生徒の確保には、四万十高校、窪川高校には、特色ある学校づくりに取り組んでもらいたい。さらに部活動も振興してもらい、高知市にない地域の学校らしい学校づくりに取り組んでもらいたい。 | <ul style="list-style-type: none"> コース制によるきめ細かい指導など、多様なニーズをもつ生徒への支援体制を強化する取組等を通じて、授業を大切にすることを醸成し、教育活動の充実を図る。 地域や中学校との連携、県内外の大学との協働を通じて、地域の普通科高校としての魅力ある取組を継続して行う。 町営塾の活用や遠隔授業の実施により、教育機会の確保や多様かつ高度な教育に触れる機会を提供する。また、地域リーダー養成コースを中心に、地域に根ざした学校としての活性化を図る 地域の生徒数の減少が見込まれる中で、四万十町にある県立高等学校2校の振興をどのように考えるか検討が必要。 <div data-bbox="2338 730 2813 1024" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>(中山間地域にある学校に共通する方向性)</p> <ul style="list-style-type: none"> ICTの活用により難関校への進学希望にも対応できる学習環境、社会性の育成の確保が必要。 市町村との連携により地元中学生からの進学率を更に向上させることが必要。 今後、更に魅力ある振興策を検討し、特色ある学校づくりを行い、域外の生徒を確保することが必要。 </div> |
| 四万十高校 | <ul style="list-style-type: none"> 連携型中高一貫教育を継続するとともに、自然環境学習や多様なニーズをもつ生徒への支援体制を強化する取組、地域と連携した生徒育成の取組等を通じて教育活動の充実を図り、生徒数の確保に努める。 過疎化が著しく、近隣に他の高校がない学校であり、特例として1学年1学級(20人以上)を最低規模として維持する。 | <ul style="list-style-type: none"> 大正・北ノ川・十川中学校との連携型中高一貫教育を推進し、中高の授業交流や「ふるさと学習発表会」を行っている。 四万十町の支援を得て、ソフトボールの専門的指導者を招聘し、中学校との定期的な合同練習、小・中学校を対象としたソフトボール教室を実施している。 小・中学校PTAと高校PTA・同窓会との懇談会)や地域おこし協力隊と連携した取組を実施している。 自然環境コースでは、研究機関や森林組合と連携して、フィールドワークや林業体験実習を実施している。 スケジュール手帳を活用した学習計画づくり等に取り組んでおり、公設町営塾は、この学習計画を同級生と共に行動に移す場として役立っている。また、インターネット学習教材を活用した取組や、1・2学年では毎日終SH等で学び直し学習等を行い、学力向上につなげている。 毎月の生徒支援会や高大連携教育事業による研修会等を行い、開発的・予防的な生徒支援を実施している。 文部科学省の「遠隔教育」の指定を受け、同一町内の窪川高等学校と遠隔教育を実践し、専門科目の講座開講を推進している。 進路については、過去3年間の平均は、進学が5割(内半数が4年制大学)、就職が5割(内7割強が県内、3割弱が県外)である。なお、国公立大学への進学者は、H26年度1人、H27年度0人、H28年度0人である。 入学者数については、普通科(定員40人)は、平成27年度13人、平成28年度13人、平成29年度9人。普通科自然環境コース(定員40人)は、平成27年度7人、平成28年度7人、平成29年度4人である。 | <p>(学校の存続)</p> <ul style="list-style-type: none"> 今後の地域を支え、発展させていく魅力ある人材の確保と育成を最重要課題として移住定住政策とも連動した取組を進めている。 地域の教育力は移住定住にも大きな影響力をもち、幼保小中高が連携して、誰もが学べる魅力ある教育環境づくりを進めることで、優しい教育の町としてのブランド化を目指している。このためにも県立高校の存在は大きな影響力があり、将来の進路や生き方に影響を与える。 中山間地域の生徒は高知市内校へのあこがれで進路を決めてしまう傾向が強い。中山間地域の高校への入学生徒の減少は、高知市内校だけでほとんどの生徒を入学できる定員を設けていることにあるのではないか。 入学者の減少が続いているが、高校の教育活動は地域の活力そのものであり、存続は四万十町の課題である。 四万十高校、窪川高校には特色ある少人数教育の活動を通して、地域の活性化にも寄与でき、地域に愛される、また、期待される学校づくりを進めてもらいたい。 中山間地域の公立高校では、少子化の進展により、大きな定員割れが続いているが、公共交通インフラが進んでいない過疎地域では、保護者負担が年々増加傾向にある。 地元からの進学者を50%以上確保していきたい。 <p>(振興策)</p> <ul style="list-style-type: none"> 町として町内2高校への通学助成を行うとともに、四万十高校には部活動・校外学習に必要な管理自動車の経費、寮の運営費の一部補助など保護者負担の軽減策を行っている。また、放課後の学びの場として、町営塾(窪川・大正の2会場でそれぞれ週5日)を開塾した。 大正・十和の山間地域では、さらに30分、40分と時間がかかる集落があり、そういったところから通学している生徒がいる。 小中高の連携では町補助金によるソフトボールでの連携が進んでいる。また、大正地域では今後ジャズ分野で連携していくことに関心が高い。 大正地域では、現在ジャズが盛り上がり、中学校での音楽部の活動や地域の会場を活用した町民のイベントも行っている。四万十高校へは音楽を通じた交流振興等も図ってほしい。 生徒の確保には、四万十高校、窪川高校には、特色ある学校づくりに取り組んでもらいたい。 四万十高校について、林業や造形の声もある。 また、寮への更なる助成の在り方、ソフトボールを中心とした部活動の振興、音楽活動など、地域の協力も得ながら活性化させたいと考えている。 | <ul style="list-style-type: none"> 連携型中高一貫教育を継続するとともに、小・中学校PTAなど地域とともに生徒育成の取組等を通じて教育活動の充実を図り、生涯を通して学び・働き、地域の伝統文化の担い手となる生徒の育成を図る。 森林組合や農業関連事業体へのインターンシップや地域との連携を通して、農業・林業技術者や地域産品の加工・販売業など地域の産業への関心を深め、就職につなげる。 町営塾の活用や遠隔授業の実施、教育機会の確保や多様かつ高度な教育に触れる機会を提供する。また、ソフトボールを中心とした部活動の振興や、音楽を通じた活性化に取り組む。 地域の生徒数の減少が見込まれる中で、四万十町にある県立高等学校2校の振興をどのように考えるか検討が必要。 <div data-bbox="2338 1633 2813 1927" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>(中山間地域にある学校に共通する方向性)</p> <ul style="list-style-type: none"> ICTの活用により難関校への進学希望にも対応できる学習環境、社会性の育成の確保が必要。 市町村との連携により地元中学生からの進学率を更に向上させることが必要。 今後、更に魅力ある振興策を検討し、特色ある学校づくりを行い、域外の生徒を確保することが必要。 </div> |

教育委員会協議会でのこれまでの意見

1 第7回教育委員会協議会での協議・確認事項

本校の最低規模について

「原則、1学年2学級以上」、「特例として1学年1学級20人以上」の最低規模の基準については、策定までの協議内容を踏まえると、基準としては尊重すべきであるが、この数字だけにとらわれることなく、検討していくべきである。

〔具体の意見〕

- ア 各地域（ブロック）の中で、現状の学校の配置についてその内容（進学拠点校や不登校や発達障害のある生徒等への対応校など）も含めて確認し、バランスのとれた学校配置を検討したうえで、最低規模を下回った学校についてどうするかを議論すべきである。
- イ 継続する場合は、「20人を確保するためにはどうするのか」や「20人を下回った場合は、ICTの活用や他校との連携も含めてどのように高校教育としての教育の質を確保していくのか」という議論や対応策を検討する必要がある。

2 第10回教育委員会協議会での意見

- 高吾地域で厳しいのは四万十高校で、通学支援など、町から支援を色々いただいているが、やはり中山間地域という厳しい条件があり、特色ある取組もしているものの、生徒数の確保にはつながっていない。
- 高校からさらに30～40分かかる所から通学している生徒もいるということなので、県としても教育格差が生じないように、何かいい方向性をこれから考えないといけない。
- 四万十町では、非常に熱心な、本当に個別、具体的な提案をしていただいている。これをぜひ、今後の県教委としての方向性にもぜひ取り入れて、地域と一体となって振興策を考えていく必要がある。
- 四万十町にある2つの高校を、それぞれ特徴を生かしながらどうするかが課題である。
- 町の方々の想いも非常に強く伝わってはくるが、それが本当にいつまでということも、将来的なことを考えると、少し検討もしていかなければいけないだろう。
- 町の人たちの想いと、現実が少しずつ乖離してきているというところが、非常に悔しいところではある。
- 四万十町にある2校の在り方については、十分検討をする必要がある。
- 例えば、四万十高校については、地域の生徒数の今後の推移というのは当然厳しい。そして、高校教育の質の問題、保護者の経済負担、そして県が取り組んでいる地域振興策と高校の役割等々踏まえながら検討を進め、四万十高校の在り方について、色々協議を進めていかななくてはならない。
- 四万十町の2校については、生徒減少という現実を見ながら、どうしていくのかということ議論していく必要がある。
- 今年の入試の状況（合格者数）を見ると、生徒を集めるのは、仮にその地域から進学率が多少上がってきたとしても、非常にこれから規模を維持することは難しい。
- 今後は、その地域になくはないということも、もう皆さん合意されていると思うので、どういふかたちで維持していくかだと思う。
- 例えば、
- ・その地域の中学校と、実質的には中高一体化せざるを得ないのかなと考える。
 - ・重要なポイントは、クラブ活動という気がしている。その地域の中学校で力を入れているクラブ活動と、その高校のクラブ活動がうまくつながっていないと、クラブが理由でほかの学校へ行かれる、そこを地域でよく相談して、考えていかなければならない。
 - ・中山間地域の課題としてのICTの活用。学習環境をしっかりと整えて、社会性を育成する。ICTを使って、ただ授業を受けるだけでなく、生徒同士がいろんなつながりを持つことで切磋琢磨し、刺激を受けて、自分も頑張ろうって感じるということが重要である。

窪川高校と四万十高校の入学に関する状況

1 入学者数

※窪川高校：入学定員（80人）、四万十高校：入学定員（80人）

| 年度 | H18 | H19 | H20 | H21 | H22 | H23 | H24 | H25 | H26 | H27 | H28 | H29 | H30 |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 窪川高校 | 55 | 41 | 31 | 52 | 34 | 41 | 46 | 27 | 38 | 34 | 41 | 26 | 25 |
| 四万十高校 | 42 | 49 | 48 | 30 | 45 | 36 | 22 | 23 | 22 | 20 | 20 | 13 | 18 |
| 計 | 97 | 90 | 79 | 82 | 79 | 77 | 68 | 50 | 60 | 54 | 61 | 39 | 43 |

2 今後の入学者数の推計 ※平成29年度までのデータに基づく推計

※窪川高校：入学定員（80人）、四万十高校：入学定員（80人）

| 年度 | H31 | H32 | H33 | H34 | H35 | H36 | H37 | H38 |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 窪川高校 | 35 | 30 | 26 | 33 | 24 | 27 | 27 | 30 |
| 四万十高校 | 20 | 16 | 13 | 11 | 12 | 8 | 7 | 11 |
| 計 | 55 | 46 | 39 | 34 | 36 | 35 | 34 | 41 |

再編振興計画での地域（現・旧市町村）別中学校卒業生数の推移（H30.3～H38.3は推計）

| 地域 | 高校 | 現市町村名 | H.19.3 | H.20.3 | H.21.3 | H.22.3 | H.23.3 | H.24.3 | H.25.3 | H.26.3 | H.27.3 | H.28.3 | H.29.3 | H.30.3 | H.31.3 | H.32.3 | H.33.3 | H.34.3 | H.35.3 | H.36.3 | H.37.3 | H.38.3 | |
|------------------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-----|
| 高 吾 地 域 | 佐川 | 日高(加茂) | 64 | 47 | 61 | 52 | 44 | 51 | 50 | 49 | 61 | 40 | 50 | 41 | 45 | 40 | 39 | 26 | 38 | 37 | 34 | 38 | |
| | | 佐川町 | 141 | 153 | 108 | 125 | 109 | 104 | 88 | 110 | 98 | 98 | 103 | 109 | 98 | 112 | 94 | 88 | 108 | 76 | 88 | 86 | 88 |
| | | 越知町 | 49 | 45 | 71 | 51 | 47 | 47 | 39 | 44 | 44 | 44 | 51 | 33 | 43 | 40 | 34 | 31 | 38 | 36 | 30 | 29 | 37 |
| | 須崎 | 池川町 | 13 | 20 | 13 | 6 | 10 | 11 | 10 | 10 | 22 | 25 | 17 | 14 | 20 | 11 | 5 | 12 | 9 | 6 | 11 | 9 | 13 |
| | | 仁淀川町 | 23 | 14 | 21 | 17 | 13 | 23 | 10 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | | 仁淀村 | 22 | 18 | 18 | 18 | 10 | 17 | 23 | 20 | 20 | 18 | 21 | 20 | 18 | 11 | 16 | 14 | 11 | 16 | 9 | 14 | 8 |
| | 窪川 | 計 | 312 | 297 | 292 | 269 | 233 | 253 | 220 | 245 | 246 | 246 | 232 | 226 | 220 | 219 | 189 | 184 | 192 | 172 | 175 | 172 | 184 |
| | | 須崎市 | 218 | 204 | 186 | 201 | 176 | 168 | 202 | 189 | 167 | 167 | 181 | 134 | 146 | 128 | 125 | 104 | 135 | 126 | 137 | 103 | 117 |
| | | 津野町 | 30 | 43 | 47 | 46 | 32 | 32 | 23 | 38 | 39 | 27 | 25 | 25 | 25 | 36 | 27 | 25 | 26 | 24 | 32 | 40 | 28 |
| | 梶原 | 中土佐町 | 63 | 56 | 55 | 61 | 58 | 65 | 66 | 48 | 49 | 41 | 40 | 48 | 38 | 36 | 36 | 36 | 38 | 24 | 32 | 32 | 41 |
| | | 大野見村 | 12 | 19 | 15 | 11 | 15 | 12 | 5 | 16 | 11 | 6 | 9 | 6 | 6 | 8 | 3 | 5 | 11 | 2 | 8 | 6 | 6 |
| | | 計 | 323 | 322 | 303 | 319 | 281 | 277 | 296 | 291 | 266 | 266 | 255 | 208 | 225 | 210 | 191 | 170 | 210 | 176 | 209 | 181 | 192 |
| 四万十 | 梶原町 | 48 | 30 | 34 | 31 | 36 | 38 | 39 | 22 | 29 | 22 | 22 | 27 | 26 | 23 | 23 | 21 | 25 | 25 | 21 | 21 | 27 | |
| | 津野町 | 28 | 26 | 27 | 15 | 21 | 24 | 25 | 20 | 20 | 20 | 18 | 25 | 13 | 17 | 15 | 16 | 13 | 21 | 14 | 10 | 11 | |
| | 計 | 76 | 56 | 61 | 46 | 57 | 62 | 64 | 42 | 49 | 40 | 40 | 52 | 39 | 40 | 38 | 37 | 38 | 46 | 35 | 31 | 38 | |
| 高吾地域計 | 窪川 | 105 | 113 | 129 | 99 | 102 | 121 | 118 | 112 | 95 | 100 | 100 | 101 | 78 | 102 | 87 | 73 | 98 | 69 | 77 | 78 | 85 | |
| | 四万十町 | 37 | 39 | 26 | 41 | 33 | 30 | 20 | 32 | 26 | 32 | 32 | 23 | 19 | 28 | 26 | 15 | 12 | 17 | 9 | 8 | 14 | |
| | 計(四万十町) | 36 | 21 | 25 | 31 | 20 | 17 | 23 | 18 | 19 | 11 | 11 | 13 | 14 | 20 | 10 | 18 | 13 | 9 | 12 | 11 | 10 | |
| 全体 | 高吾地域計 | 889 | 848 | 836 | 805 | 726 | 760 | 741 | 740 | 701 | 670 | 623 | 595 | 619 | 619 | 541 | 497 | 563 | 489 | 517 | 481 | 523 | |
| | H29との増減 | 266 | 225 | 213 | 182 | 103 | 137 | 118 | 117 | 78 | 47 | 0 | ▲28 | ▲4 | ▲82 | ▲126 | ▲60 | ▲134 | ▲106 | ▲142 | ▲100 | | |
| | 公立計 | 6,079 | 6,053 | 6,045 | 5,969 | 5,771 | 5,795 | 5,482 | 5,331 | 5,354 | 5,290 | 5,275 | 4,923 | 4,829 | 4,829 | 4,590 | 4,495 | 4,566 | 4,346 | 4,473 | 4,133 | 4,102 | |
| 県内計 | 国立計 | 6,236 | 6,210 | 6,199 | 6,121 | 5,930 | 5,949 | 5,639 | 5,489 | 5,492 | 5,422 | 5,408 | 5,062 | 4,963 | 4,726 | 4,615 | 4,688 | 4,469 | 4,596 | 4,252 | 4,224 | | |
| | 私立計 | 1,200 | 1,204 | 1,158 | 1,136 | 1,127 | 1,123 | 1,142 | 1,137 | 1,166 | 1,163 | 1,135 | 1,130 | 1,049 | 1,042 | 1,070 | 1,075 | 1,074 | 1,055 | 1,067 | 1,083 | | |
| | 計 | 7,436 | 7,414 | 7,357 | 7,257 | 7,057 | 7,072 | 6,781 | 6,626 | 6,658 | 6,585 | 6,543 | 6,192 | 6,012 | 5,768 | 5,685 | 5,763 | 5,543 | 5,661 | 5,319 | 5,307 | | |

窪川高校と四万十高校の2校に関する検討事項について

検討事項 2校の存続の有無について

- (1) 各校の入学人数の実績及び将来の推計
 窪川高校：平成29年度(26人)、平成30年度(25人)、平成31年度(35人)、平成32年度(24人)、平成33年度(30人) ⇒40人を下回る
 四万十高校：平成29年度(13人)、平成30年度(18人)、平成31年度(20人)、平成32年度(12人)、平成33年度(11人) ⇒20人を下回る
 (2) 課題

1校としての規模が小さく、現在は両校あわせても実質1学級規模の生徒しかおらず、生徒の多様な学習ニーズや集団生活による社会性の育成、部活動等において、高等学校としての教育の質を確保することが難しい状況がある。
 将来的にも生徒数が減少していくことが予測されており、どのような検討が必要となっている。

〔2校で存続する場合(案1)〕

⇒ 今後の検討事項 各校の活性化策を検討
 学級数や学科・専攻・コースをどうするのか。 少人数において社会性の育成をどう図るのか。 生徒数確保をどのように行うのか。

〔統合する場合(案2・3)〕

検討事項 校地をどうするのか

- (案2) 窪川高校と四万十高校を併用 (キャンパス制)
 (案3) どちらかの校地に一本化

⇒ 今後の検討事項 統合後の活性化策の検討

- (1) 学科編成とクラス数 → ○2学級又はそれ以上とするのか。 ○学科・専攻・コースなどをどうするのか。
 (2) 部活動の魅力化(地域で地盤のある運動や文化は重点的にサッカー、ソフトボール、吹奏楽(ジャズ))
 (3) 市町村立中学校との連携 → 四万十高校が現在実施している四万十町立中学校との「連携型中高一貫教育校」を拡大するのか。

| 高校 | 案 | 窪川高校 | 四万十高校 | 内容 (○:メリット、●:デメリット、★:課題) |
|----|----|-------------|---------|--|
| 継続 | 案1 | 本校 | 本校 | ○原則、今のまま学校が存続する(地元で学べる場が残る)。 ○地域貢献活動などにより、地域に活力がでる。 ○学校を拠点として移住・促進に向けた施策や地域活性化の施策を展開できる。 ●生徒数の減少のなか、今以上に入学者が減少していく。 ●学校行事や部活動の運営等の面で活力が失われる。 ★生徒数減に伴い、選択科目が開設できない状況が生じてくる可能性がある。 ○それぞれ地域で学べる場(高校のキャンパス)がある。 ○地域貢献活動などにより、地域に活力がでる。 ○学校を拠点として移住・促進に向けた施策や地域活性化の施策を展開できる。(学校行事、部活動など) ○一定の規模(生徒数)を持って、活力ある教育活動を展開できる。(学校行事、部活動など) ●交流のためにはキャンパス間の移動(時間)とそれのための手段の確保が必要となる。 ●本校と比べると合同行事等も実施するため、それぞれのキャンパスの独自性が一部失われる。 ★小規模の学校(キャンパス)が分散することで、どのように各キャンパスでの高等学校としての教育の質の確保や活力ある教育活動を担保していくかが課題となる。 |
| | 案2 | ○○キャンパス | ○○キャンパス | |
| 統合 | 案3 | どちらかの校地に一本化 | | ○一定の規模(生徒数)を持って、活力ある教育活動を展開できる。 ○高等学校としての教育の質の確保が一定、担保される。 ●どちらかの地域では、地元で学べる場(学校)がなくなる。 ●住民の人口流出などの問題が生じる。 ★地理的環境、経済的理由、交通機関の整備など実態から、自宅からの通学が困難になる生徒への対応が必要となる。 |

学校の在り方別のメリット・デメリットについて

| 在り方 | 条例 | 規則 | 学校の設置・教職員の配置 | メリット | デメリット |
|--------|--------------------|--|---|---|--|
| 現状のまま | そのまま 学校名記載あり | そのまま 学校名記載あり | それぞれの学校 両校に校長・教頭・事務長 ※副校長を置くかは判断 | <ul style="list-style-type: none"> 地域に学校が残る。 校名はそのまま。 学校運営の独自性が保障される。 1校としての教員配置あり。 | <ul style="list-style-type: none"> 部活動において、生徒数確保が難しく、合同チームでは全国大会に出場できない。 教員数と生徒数が少なく、選択科目や習熟度授業等が開講しにくい。 学校行事や日常の生徒会活動等の運営が困難である。 施設使用のためのランニングコストがかかる。 現状では最低規模を順守できない。 |
| 本校 | 変更 学校名の記載なし | 変更 △△分校として記載 | 本校と分校 校長・事務長は各1名 教頭は本校・分校に各1名 (計2名) ※副校長を置くかは判断 | <ul style="list-style-type: none"> 地域に学校が残る。 学校運営の独自性が保障される。 分校としての教員配置あり。 | <ul style="list-style-type: none"> 校名は一本化。 ※○○高校△△分校 部活動において、生徒数確保が難しく、合同チームでは全国大会に出場できない。 教員数と生徒数が少なく、選択科目や習熟度授業等が開講しにくい。 学校行事や日常の生徒会活動等の運営が困難である。 施設使用のためのランニングコストがかかる。 原教育委員会としては、「基本的に本校の分校化はしない」という方針である。 現状では最低規模を順守できない。 |
| キャンパス校 | 変更 一つの学校の学名のみ記載 | 変更 他県の事例では一つの学校名のみ ※「○○キャンパス」と記載するかは横断事項 | 複数のキャンパスを持つが、一つの学校 校長・事務長は各1名 教頭は各キャンパスに1名 (計2名) ※副校長を置くかは判断 ※高知県としては初 ※東北・近畿・中国・九州 地方等で設置あり | <ul style="list-style-type: none"> 地域に学校が残る。 一つの学校として運営ができ、生徒・教職員のスケジュールメリットがある。 部活動において、1校として全国大会に出場できる。 授業や部活動、学校行事の交流を通して、社会性の獲得を担保できる。 最低規模を順守できる。 | <ul style="list-style-type: none"> 校名は一本化。 ※キャンパス名はそれぞれで名称を付けられる。 両方のキャンパスともに特色のある教育内容を提供していかないと、生徒数が今以上に減少していく可能性がある。 1校としての教員配置となり、教員の加配が必要となる。 施設使用のためのランニングコストがかかる。 キャンパス間の移動時間が長時間になると、キャンパス制のメリットが弱まる。 |
| 完全統合 | 変更 一つの学校の学名のみ記載 | 変更 一つの学校名のみ記載 | 一つの学校 校長・事務長は各1名 教頭は1名 ※副校長を置くかは判断 | <ul style="list-style-type: none"> 一つの学校として運営ができ、生徒・教職員のスケジュールメリットがある。 部活動の活性化が期待できる。 生徒の実態や進路希望に応じた選択科目や習熟度授業等が開講しやす。 最低規模を順守できる。 | <ul style="list-style-type: none"> 一方については、地域から学校がなくなる。 校名は一本化。 山間部などでは、奥まった地域の生徒の通学手段の確保が難しい。 |

※最低規模：本校（1学年2学級以上）、本校の特例校（1学年1学級20人以上）、分校（1学年1学級20人以上）、定時制夜間部（全校生徒で20人以上）
 ※キャンパス制：ここ7～8年、東北や近畿、中国、九州地方の一部の県で導入されはじめた学校の在り方。中山間地域や交通手段が不便な地域の学校を存続させるため、学校の最低規模問題を回避し、社会性の育成や部活動等において活力ある活動ができるようにするための学校の在り方。

地域別の県立中学校・高等学校の在り方の方向性について

| 学校名 | 「前期実施計画」で明記した学校の在り方 | 平成 29 年 10 月末現在の状況 | 地域会でのご意見 | 「後期実施計画」における学校の在り方の方向性 |
|------|--|---|---|---|
| 清水高校 | <p>【全日制】</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成 26 年度より実施している清水中学校との連携型中高一貫教育を推進する。地域との連携や多様なニーズをもつ生徒への支援体制を強化する取組等を通じて教育活動の充実を図り、生徒数の確保に努める。 過疎化が著しく、近隣に他の高校がない学校であり、特例として 1 学年 1 学級 (20 人以上) を最低規模として維持する。 南海トラフ地震による津波への対応のため、高台への移転を検討する。 <p>【定時制】</p> <ul style="list-style-type: none"> 定時制については、働きながら学ぶことや学び直しなど、様々な学習歴をもつ生徒のニーズに応え、進路実現を支援する。 | <p>【全日制】</p> <ul style="list-style-type: none"> 平成 26 年度から清水中学校との連携型中高一貫教育を推進しており、連携授業による教員の相互乗り入れや、中高共同の部活動交流、防災教育、キャリア教育講演会、弁論大会等を実施している。 教務部を中心に「学力向上支援プロジェクト」を実施し、家庭学習時間の確保に努めている。特に基礎学力の定着については、習熟度別学習や加力補習、インターネット学習教材の活用等を通じた取組を実施している。 「未来プロジェクト」と題して、様々な場面を活用して、社会性や自己肯定感の育成、ポートフォリオによる進路指導を行っている。 清水中学校 1 校から全員が入学してきており、入学者数 (定員 80 人) は、平成 27 年度 51 人、平成 28 年度 47 人、平成 29 年度 47 人である。(清水中学校からの進学率: H27 年度 44%、H28 年度 40.5%、H29 年度 46.1%) 土佐清水市全体として、公共機関や教育機関の高台移転を推進しており、清水高校の高台移転について、関係部署と平成 28 年度から定期的に協議を行っている。 <p>【定時制】</p> <ul style="list-style-type: none"> 定通併修等により 3 年間で卒業できる制度 (三修制) を導入している。 個別支援を徹底し、外部機関とも連携しながら、生活規律の確立や社会性育成の取組を推進している。 在籍生徒数 (在籍定員 160 人) は、H27 年度 19 人、H28 年度 21 人、H29 年度 19 人である。 | <p>【全日制】 (学校の存続)</p> <ul style="list-style-type: none"> 清水高校は、幅多の地理的な条件や生徒の分布状況、通学の利便性からも、また、普通高校を自由に選択できるという観点からも生徒数、入学者数等を勘案しながらも是非、存続を望む。 (南海トラフ地震対策) 集中的に高台に公共施設を移転している。いよいよ清水高校である。前期の再編振興計画の中には、高台への移転を検討するという文言が入っているので、後期の計画には可及的速やかに実現できるように協力願いたい。 高台には住宅が増えて、交通の便も充実してきている。清水高校については、めばしい土地があり具体的に県教育委員会に提案している。コンパクトな校舎で清水中学校とより連携して、使えるものは一緒に共有しながら中高一貫をさらに強めていきたい。小さくても素晴らしい高校を目指したい。 (学科・教育内容) 清水高校は少子高齢化で厳しい状況である。私たちの時代は 6 クラス有り、漁業科があった。これまで素晴らしい人を送り出してきた。この漁業科には大月町、宿毛市、旧佐賀町からも進学してくるという特色ある学科であった。 清水高校への進学率を上げるためには、特色ある学校づくりが大切である。ジョン万次郎の縁でアメリカとの交流もあるので国際交流に特化したコースなり特色ある学校づくりが大切である。 清水高校への進学率を上げるためには、2 年次からの大学進学コースと専門学校・就職コースや、関西学院の指定校の話、市の奨学金のことを知っていただき、4 年生大学を目指す子供達への強化を市民にアピールすることが必要と思う。 連携型中高一貫により、子供達がいろいろな交流ができてきた。中学生も高校生も発表する場を通じて態度や内容も洗練されてきた。 土佐清水市では英語検定受験料の半額を助成している。 アメリカの 2 つの都市と姉妹都市の連携をしている。清水高校からは短期留学制度で、土佐清水市姉妹都市友好協会から助成をし、これまで 189 名の生徒が留学の経験をしている。 <p>【定時制】 (学校の存続)</p> <ul style="list-style-type: none"> 定時制は、生徒が少ないが、中学生の時に不登校になる等、いろいろな事情で精神的にも全日制に通うことができない子供の受け皿として、土佐清水市になくてはならない存在であり、その役割は大きい。 | <p>【全日制】</p> <ul style="list-style-type: none"> 清水中学校との連携型中高一貫教育による連携授業の推進や、ジョン万次郎などの地域に関連した教育活動を推進することで、学力の向上や社会性の育成を図り、地域に貢献できる人材を育成する。 短期海外留学の実施や、英語検定の取得拡大などにより、語学の教育活動を強化する。 南海トラフ地震による津波被害から確実に生徒を守るために速やかに高台へ移転する。 <p>【定時制】</p> <ul style="list-style-type: none"> 働きながら学ぶことや学び直しなど、多様なニーズを持つ生徒に応じた支援を行い、生活規律の確立や社会性の育成を図り、進路希望の実現を目指す。多様な生徒の居場所づくりや受け皿として、定時制の役割を果たす。 <div data-bbox="2220 1318 2843 1661" style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>[中山間地域にある学校に共通する方向性]</p> <ul style="list-style-type: none"> ICT の活用により難関校への進学希望にも対応できる学習環境、社会性の育成の確保が必要。 市町村との連携により地元中学生からの進学率を更に向上させることが必要。 今後、更に魅力ある振興策を検討し、特色ある学校づくりを行い、域外の生徒を確保することが必要。 </div> |

教育委員会協議会でのこれまでの意見

1 第 8 回教育委員会協議会での協議・確認事項

(1) 南海トラフ地震への対応について

被害が予想されている学校については、生徒の安全第一で検討していく。なお、その際は、想定外も想定していく。

また、学校の移転については、浸水深だけでなく、市町村のまちづくりや BCP※も含め、総合的に判断していく必要がある。

〔具体の意見〕

清水高校については、一刻も早く高台へ移転すべきである。

(2) 定時制（夜間部）の最低規模について

定時制（夜間部）については、基本的に「本校」や「分校」と最低規模についての考え方が違う。定時制（夜間部）は、規模の重要性ということよりも、弱い立場にある生徒にとっての学びのセーフティーネットとしての側面を重視すべきである。

よって、「学校全体の生徒数が 20 人以上」の最低規模の基準については、望ましいという数字ではあるが、この数にこだわることなく、地域にとって必要な定時制（夜間部）は残していくべきである。

〔具体の意見〕

ア 維持する手法として、ICT を活用した社会性の育成など、新たな学びの在り方について工夫する必要がある。

イ 最低規模を下回っている学校は複数校あるが、大きく 20 名を下回っている学校はないことから、「後期実施計画」では、募集停止する必要はない。

2 第 10 回教育委員会協議会での意見

- 清水高校の高台移転については、ぜひ高台への検討をしていただきたい。
- 清水高校は、早くぜひ高台移転が順調に進んで、清水中学校とうまく連携できるとよい。
- 清水高校ですが、本当に速やかに高台移転ということを考えていかないと、いつ起こるか分からない震災に子どもたちの命をさらしている、というような思いがしますので、これについては、速やかに高台へ移転するという方向を、ぜひ進めていただきたい。
- 清水高校についても、これだけ地域の方が準備万端に構えてくださっているところなので、移転の環境は整っているということで、早期の移転というものを考えていくべきかなと思う。
- 清水高校は、連携型中高一貫校として、色々な交流を通して。やはり地震対策・津波対策ということで、高台に早く移転を考えて、新しい環境でのスタートに期待している。

清水高校の入学に関する状況

1 全日制

(1) 入学者数

※入学定員 (80 人)

| 年度 | H18 | H19 | H20 | H21 | H22 | H23 | H24 | H25 | H26 | H27 | H28 | H29 | H30 |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 清水高校 | 82 | 76 | 84 | 76 | 81 | 75 | 55 | 74 | 42 | 51 | 47 | 47 | 34 |

(2) 今後の入学者数の推計

※平成 29 年度までのデータに基づく推計

※入学定員 (80 人)

| 年度 | H31 | H32 | H33 | H34 | H35 | H36 | H37 | H38 |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 清水高校 | 37 | 33 | 33 | 41 | 31 | 30 | 26 | 22 |

2 定時制 (夜間部)

在籍者数

| 年度 | H22 | H23 | H24 | H25 | H26 | H27 | H28 | H29 |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 清水高校 | 21 | 16 | 17 | 20 | 17 | 19 | 21 | 19 |

再編振興計画での地域（現・旧市町村）別中学校卒業生数の推移（H30.3～H38.3）は推言

| 地域 | 高校 | 現市町村名 | H.19.3 | H.20.3 | H.21.3 | H.22.3 | H.23.3 | H.24.3 | H.25.3 | H.26.3 | H.27.3 | H.28.3 | H.29.3 | H.30.3 | H.31.3 | H.32.3 | H.33.3 | H.34.3 | H.35.3 | H.36.3 | H.37.3 | H.38.3 |
|------------------|-------------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
| 幡 多 地 域 | 中 村 | 四万十市 | 312 | 340 | 347 | 356 | 343 | 320 | 300 | 331 | 319 | 313 | 320 | 305 | 275 | 281 | 287 | 254 | 255 | 279 | 240 | 259 |
| | | 佐賀町 | 38 | 26 | 38 | 42 | 29 | 24 | 36 | 29 | 26 | 26 | 24 | 32 | 23 | 26 | 12 | 22 | 14 | 13 | 14 | 19 |
| | | 黒潮町 | 84 | 96 | 73 | 65 | 70 | 71 | 52 | 75 | 53 | 53 | 62 | 47 | 69 | 55 | 45 | 50 | 54 | 41 | 55 | 46 |
| | 大 方 | 計 | 434 | 462 | 458 | 463 | 442 | 415 | 388 | 435 | 398 | 399 | 399 | 399 | 397 | 356 | 338 | 359 | 322 | 309 | 348 | 305 |
| | | 西土佐 | 32 | 31 | 32 | 33 | 23 | 26 | 27 | 27 | 27 | 36 | 25 | 28 | 26 | 21 | 20 | 10 | 17 | 17 | 14 | 11 |
| | | 宿毛市 | 205 | 224 | 230 | 231 | 237 | 220 | 206 | 187 | 175 | 175 | 174 | 167 | 141 | 173 | 137 | 128 | 148 | 134 | 157 | 145 |
| | 宿 毛 工 | 三原村 | 17 | 14 | 17 | 15 | 11 | 18 | 9 | 10 | 8 | 8 | 12 | 12 | 11 | 6 | 13 | 6 | 7 | 7 | 0 | 5 |
| | | 大月町 | 51 | 56 | 67 | 50 | 60 | 56 | 50 | 42 | 41 | 41 | 52 | 30 | 38 | 43 | 24 | 39 | 31 | 25 | 27 | 24 |
| | | 計 | 273 | 294 | 314 | 296 | 308 | 294 | 265 | 239 | 224 | 224 | 238 | 209 | 190 | 222 | 174 | 173 | 186 | 166 | 184 | 174 |
| | 清 水 | 土佐清水市 | 152 | 144 | 149 | 138 | 130 | 130 | 137 | 105 | 119 | 119 | 116 | 103 | 89 | 87 | 77 | 78 | 95 | 73 | 69 | 60 |
| | | 幡多地域計 | 891 | 931 | 953 | 930 | 903 | 865 | 817 | 806 | 777 | 778 | 739 | 739 | 702 | 686 | 609 | 620 | 620 | 565 | 615 | 550 |
| | | H29との増減 | 152 | 192 | 214 | 191 | 164 | 126 | 78 | 67 | 38 | 38 | 39 | 0 | ▲ 37 | ▲ 53 | ▲ 130 | ▲ 119 | ▲ 119 | ▲ 174 | ▲ 124 | ▲ 189 |
| | 全 体 | 公 立 | 公立計 | 6,079 | 6,053 | 6,045 | 5,969 | 5,771 | 5,795 | 5,482 | 5,331 | 5,354 | 5,290 | 5,275 | 4,923 | 4,829 | 4,590 | 4,495 | 4,566 | 4,346 | 4,473 | 4,133 |
| 国公立計 | | | 6,236 | 6,210 | 6,199 | 6,121 | 5,930 | 5,949 | 5,639 | 5,489 | 5,492 | 5,492 | 5,422 | 5,408 | 5,062 | 4,963 | 4,726 | 4,615 | 4,688 | 4,469 | 4,596 | |
| 私立計 | | 1,200 | 1,204 | 1,158 | 1,136 | 1,127 | 1,123 | 1,142 | 1,137 | 1,137 | 1,166 | 1,163 | 1,135 | 1,130 | 1,049 | 1,042 | 1,070 | 1,075 | 1,074 | 1,065 | | |
| 県 内 計 | 県内計 | 県内計 | 7,436 | 7,414 | 7,357 | 7,257 | 7,057 | 7,072 | 6,781 | 6,626 | 6,658 | 6,585 | 6,543 | 6,192 | 6,012 | 5,768 | 5,685 | 5,763 | 5,543 | 5,661 | | |
| | | 県内計 | 5,307 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | 5,319 | |

清水高校の高台移転に関する今後の流れ

(1) 清水高校は中山間地域の学校でもあることから、地域と学校が一緒になって、学校の活性化策について協議する会を設置し、「後期実施計画」に位置付ける具体案を作成する。

(例) 第6回教育委員会協議会で出された意見

- ・国際交流に特化したコースを設ける
- ・4年生大学を目指すためのコースの充実
- ・連携型中高一貫教育の内容の充実

(例) 第10回教育委員会協議会で中山間地域にある学校に共通する方向性として示された内容

- ・ICTの活用により難関校への進学希望にも対応できる学習環境、社会性の育成の確保が必要。
- ・市町村との連携により地元中学生からの進学率を更に向上させることが必要。
- ・今後、更に魅力ある振興策を検討し、特色ある学校づくりを行い、域外の生徒を確保することが必要。

(2) 候補地の検討や施設設備等については、下記の案1～3の検討も含め、高等学校課が中心となり、清水高校及び土佐清水市から意見などをうかがいながら詰めていく。なお、必要に応じて地域や学校も参加した会議などを開催する。

(案1) 中学校と高等学校が同居

(案2) 中学校と高等学校で学級や職員室を中心とした教室は別棟とし、それ以外はできるだけ共有する

(案3) 中学校と高等学校は全ての施設が別